

「長崎被爆日記」(1945年8月9日~8月18日) 松尾典子

「原爆被爆60年 私たちの証言」(八王子市原爆被爆者の会編集)

昭和20年8月9日

今日は勤務の日である。家で眠る日は空襲警報が発令されても母がぎりぎりまで寝かせてくれるので朝はとても気分爽快である。

今晚は又司令部(南山手町)で定期便が寝かせてはくれないだろう。飛行艇が五島沖をうろうろするので警戒警報が発令される。このごろは毎晩の様に現れ長時間飛行しているので警報が解除にならない一種の神経作戦である。この為私達は一晩中勤務となる。

明日は又疲れて不機嫌な顔で家に帰ることになる。喜美子姉さんは宿直で昨夜は又会えなかった。男の先生が出征されて先生が少なくなっているのので女の先生にも宿直がしょっちゅう廻ってくる。

朝八時家を出て途中でふとモンペのポケットにチリ紙がないのに気付く慌てて引き返すと母が「何の忘れ物」と顔を出したので「チリ紙チリ紙」とわめき立てる。母はあきれた顔をして「いつも救急袋の中に入れてあるでしょうに、わざわざ帰ってこなくても」と言われ、あっそうかと腰の救急袋をおさえて駆け出す。

司令部について下番の人から申し受けをして朝からずっと警報が発令されているので全員勤務につく。武藤さんと私が交換につく。

「11時島原西進のB29二機長崎クハ(空襲警報発令)」、通信室で声がしたと思った瞬間パッと入り口から閃光(せんこう)が走り、もの凄い爆風にガーンと耳が聞こえなくなったと思い、乍ら交換台に必死で伏せた。

外で作業をしていた兵隊さんがこの地下室になだれ込んできた。

司令部に落ちた。いや新型爆弾か、浦上方面は火の海だと口々に叫んでいる。その声にハッとしながら司令官、副官殿の家族を案ずる電話をつなぎながら、私の家(城山町2丁目)は、家族はどうなっただろうと不安が広がる。

ガラスの破片で負傷した兵隊さんたちが次々と運び込まれてくる。交換室の横で応急の縫合手術が行われる。狭い地下室は急に血生臭い空気がよどんできた。やがて「林田、武藤交代」の声にはっとして我に還る。通信室に入ると隊長殿が「どうだ怖かっただろう」と一寸表情をくずされた。

皆は誰かにうったえたい様な不安な眼の色で勤務している。みんな家族の安否を気遣っているのだ。各電話線はもう情報を発しない。

司令部に今の爆弾を何とみるか、被害状況は、と食い下がってくる。そのたびに私達は隊長殿の方をみるが作戦室の緊張した空気はまだ今の空爆について一言も発していない。

隊長殿は私たちの受持ちの線を暫く切らせて私共一同に静かな調子で話し出された。

「皆、家族のことは心配だろう。しかし軍人軍属はその一身は国家に捧げた筈、よく落ち着いて軍務を全うする様に」との訓示をされる。そうだ、私達は今にも飛び出して肉親

を救いたい、元気な力をかしたい。でもそれは許されない。

派遣された兵隊さんによって被害状況が刻々と入ってくる。長崎駅から先は進めないこと、浦上方面の被害は言語に絶する、市の半分は壊滅。

私達浦上方面の者は絶望的な気持ちで「帰らせてください、何とか帰ってみます」と口々に叫んだ。どうせ今行ったところでどうにもならない、駅から先はゆけないのだからと皆に止められ乍ら自分自身を抑制することができない。

「それなら舟だったら稲佐あたりまでゆけるだろうから様子を見に行くだけならなんとかしてやろう」と隊長殿に言われてみて、はじめて軍にとってこの大変なとき私たち僅かな者のために舟までだしてもらっては済まない、止そうと皆ではげまし合って勤務についた。もうあまり情報もないボックスにしょんぼり入っていると西村少尉殿が「君の家どの辺りなの」と声をかけられた。いろんな思いが一気に溢れどっと涙が出た。

夜八時やっと勤務をとかれて恐怖の場面を想像しながら胸をふるわせて外に飛び出す。なんと司令部の上空までどす黒い雲に火の光が映ってその不気味な空模様に胸をつかれた。走って将校宿舎に行く階段を上ってみると、なんとという騒乱、駅から先は全部火の海、浦上方面はただただ炎のまっ只中。私は言葉もなく火の海をみつめているうち涙が止めどなく頬を伝ってくるのをどうしようもなかった。

今家が焼けている、家族が死んでゆき。

私達は宿舎に引き揚げもせず一晩中泣き、乍ら火の海を見ていた。

8月10日

朝早いうちに私たち浦上方面の者には、一人ずつ兵隊さんをつけられて必ず報告に帰ってくる事と言い含められて司令部を出た。

救急袋の中には夜食のカンパンと朝食を食べずに握ったおむすびが、生きていてくれたらと家族の者の為に入っている。

母は心臓病の持病があるからこれ程のショックには耐えきれなかったかもしれない。父が防空壕をもう少し完全にしとかなないと心配だからとちょうど会社は休暇をとって伊王島から帰ってきていて良かったと思う。

外に出ると南山手町のこの辺りまで全身着物を焼き取られ裸足の男の人がとぼとぼとやって来る。こんな重傷の人が一人で裸でこの辺りまで帰ってくるのだから現場の惨状混乱は大変なものだろう。人間も強いものだ、あれだけの重傷でここまでの道程を歩いて来るのだから。

八月の炎天の下で防空頭巾の中の額がじっとり汗ばんでくる。

県庁も半分焼けている。駅までくるとそろそろ死体が眼につき出す。馬が空気を入れられた様にふくらんで倒れている。いつも大波止で荷物運びをしていた浅いちゃんが倒れてまだ動いているが、誰もかまう人もいない。活水女学校の報国隊の人が先生につれられて3、4人裸足で髪はふりみだし、顔は流れた血が固まっておはぎの皮をかぶった様にな

って歩いて来る。いつも顔見知りの人たちだけに胸をつかれた。

だんだん倒壊が烈しく道が悪くなって来る。突然不気味に空襲警報が鳴り出す。対比する場所もない。私たちは辛うじて倒壊した物陰にかがみ込んだ。

にぶい音と共にB29が白く輝き乍ら飛んでくる。それを見送ると私たちはもう飛び出して歩き始める。少しでも早く先に進んで行かなくてはいけないのだから。電車道の右側の倒壊物に腰だけ出して兵隊さんが前のめりになっている。近寄ってみたら腰から上はない。思わず眼をそむけた。兵隊さんが短剣の番号をしらべていたが伊王島の部隊の人だとの事、きっと公用で来ていてこの空襲にあったのであろう。

やっと井樋の口に出る。銭座小学校が物凄い火焰をあげている。

倒壊が烈しくどう進んでよいか解らない。

ここで友達が一人自分の家の方角を目指して、私たちと別れた。「しっかりして、頑張るのよ」と私たちは声をかけたが振り向きもしないで行った。

もう道の両側は黒焦げの死体のごろごろ、眼をそむける余裕もない。道もまっ黒く焦げている。幸いなことに電車道を辿ってゆくとなんとか歩ける。両側は倒壊物で足を踏み込むこともできない。

暑さと熱気と、異様な臭気で気が遠くなりそう。私たちが歩いている左側の製鋼所、浦上駅も無惨にも鉄骨がアメの様にぐにゃぐにゃになっている。

右側の山王神社の鳥居が片方の足で立っている。医大の煙突はへし曲り今にも倒れそう。

この辺りは両側の建物が全部倒壊焼失しているので両方の山が迫って私たちはまるで摺り鉢の底にいるような気がする。

鉄筋コンクリートの建物だけが倒れかけて残っている。外は全部焼け野原だ。

その焼け野原の淵学校の方角から父が歩いて来るではないか。巻脚絆をつけ救急袋を下げて。私は思わずアッお父さんをつまづきつまづき駆け寄ってみると、人違いだった。兵隊さんや、友達の見つめている所の引き返ししながら、もう精も根も尽き果てる思いだった。

お昼近くと思われる頃やっと松山町に出た。

平山さん、平澤さん、私、兵隊さん3人で平山さんの家の焼け跡の防空壕に行ってみる、焼けただれている。平山さんは言葉もなくむせび泣いている。兵隊さんがお骨だけでも拾って帰ろうと肩をたたきながら言っている。私達もそっと別れて歩き出した。もう生物はこんな中で生きのびられる筈もない。私の心もすっかり覚悟がきまった。せめてお骨だけでもわかればよいがと、そのみ思いながら、今度は平澤さんの家に向かった。

松山町の通り、いつも私達が家から電車の停留所まで通ったこの道、丁度ここを歩いていたであろう人たちが倒れた形のままで黒こげになっている。

橋を渡ると今までの大通りと違って住宅地のため、道路が狭く焼け残った倒壊物のため一步一步困難を窮めた。

城山小学校の正門の方の崖下の死体を兵隊さんが一カ所にまとめている。姉はどうなったんだろうか。もしやあの中にとまって、皆に暫く待ってもらって恐る恐る行ってみる。

思わず眼を覆いたくなる無惨な死体、爆死とはこんなものか、いままでは黒こげばかりを見てきた。この辺りの死体はふくらんで赤茶けた肌の色、目玉は飛び出し、お腹の破れているもの、丸く開いた口には内臓がそこまで飛び出してきている。訓練のとき爆弾が落ちて伏せるときは両手で耳と眼をふさぎ口は開ける様にと言われていた。こんなことになるのを防ぐ為だったのだ。

胸はドッキ、ドッキと高鳴ってくる。

もう死体がありません様にと祈っている。わずかに体に付着している洋服で判別するしかない。見あたらないのでホッとする。私達は重い気分を抑えながらまた進む。この辺りまでくると、いるではないか、人が、生きている人がいる。水を求めて入ったのか川の中から負傷者たちが私達をみて「兵隊さん助けてください、水を下さい」と叫んでいる。兵隊さんは「待ちなさいよ、人を沢山連れてすぐ来るからね」と眼をそらしながら進んで行く。

平澤さんの焼け跡には誰もいない。少し離れた防空壕に衣類の包みだけが土をかぶっている。

この辺りは松山町辺りの様な土まで黒こげになる程の焼け方ではない。浜口町、松山町の辺りが一番ひどかった。

あの辺りの惨状をみると恐らく猫一匹生きていれる筈はないと思っていた。城山町に入ってはじめて負傷者をみたときの嬉しさ、こんなだったら私の家も誰か生きていてくれるかもしれないというかすかな希望が湧くと同時にその負傷がどんなものか恐ろしい。

平澤さんは声をつまらせながら、お骨も解らないなんてと言いながら今度はあなたの家に行ってみましょうと四人で歩き出した。

平澤さんのお父さんは三菱の青年学校の先生で、幸町にいらっしゃったから多分お父さんも駄目だったのではないかしら。

私のうちは、皆はどんな姿を私にみせてくれるのだろうか、私はもう行くのが恐ろしくなった。

相変わらず生き残っている人たちは炎天の道端にギラギラと照りつける太陽をまともに受けて横たわり私達に向かって口々に「助けてください」と叫んでいる。この人たちは元気な身内の人がいなかったため動くこともできず、元気な私達に向かって必死にたのんでいるのだ。私はもう耳を掩いたくなった。

城山小学校の裏手まで来ると学校の横、穴の防空壕の中から「秋ちゃんっ」と平澤さんのお姉さんがかけだしてきた。「みんな生きている。防空壕の中にねかせているのよ」と務めに出ていたために助かったお姉さんは昨夜、山越えして一晩中歩き続けて帰ってきたそう。元気そうに片手にやかんをさげている。平澤さんは急に元気になり「今度はあなたね。元気を出して行ってね」とはげましてくれた。このお姉さんはうちの上の姉と同年。

いよいよ兵隊さんと二人になってますます悪い道をよじ登ったり、すべり落ちたり兵隊さんにひっぱられ家の裏にあった大きな木が爆風で折れて下の方だけ残っているのを目印

に兵隊さんの「ずい分遠いね」と言う声を何度も聞きながら、私は言葉もなく必死に進んでゆく。倒壊した建物の中を何度もつまずきながら我が家のあったらしい所にやっとの事で辿りつく。(略)

防空壕の前に大きな二本の木が、うつぶせに倒れた父の背中を押しつぶしている。地下足袋の片方がぬけて父の足のかかところが無残に傷ついている。壕の中をのぞくと、一家の中心で隣組の防空班長をしていた元気な姉が全身火傷で横たわり、弟も青い顔で横向きになってうめいている。そんな二人を母がしょんぼり座って見守っている。

その横にはこれも全身火傷のお隣りのおばあさんが一緒に入れられている。

「お母さんっ」「ああ典子さんよく帰ってくれたね、お父さんを見て頂戴、あんなかっこうで死んでしまって」。姉は「典子ちゃん見て頂戴、こんな顔になって死んだ方がましよ」と声を震わせる。母が「またそんなこと言って、こんな火傷は痕が残らないそうだから」と慰める。

「ほんとよ、お姉さん普通の火傷と違うからきずは残らないそうよ」と私も言ったが、姉は黙ってしまった。弟は苦しそうに呻いている。

私は涙が出るどころか身の引き緊る思いがした。私だけなのだ、元気なのは。

私は救急袋からおむすびを取り出したが誰も食べようとしない。

付近にとんでいた洗面器一つ、蓋のないやかんをやっと見つけて家の井戸に行ってみる。木片が一杯落ち込んでいて水は汲めない。近所の小父さんに聞いて遠くの井戸まで行き、みんなに水を吞ませて弟の顔をきれいに拭いてやり、お姉さんと弟の額にぬれ手ぬぐいをのせてやる。

兵隊さんが「もう時間だから報告に帰らなくては」と言われる。私はびっくりした。「皆がこんな状態なのにほおっておいて又司令部まで行かなくてはいけないのですか」「隊長殿が報告に帰って来る様にとの命令だから」。私は黙った。中からお姉さんが「行ってきなさい、高明ちゃん、ふんふん言うんじゃないの、お姉ちゃん心配でゆけないじゃないの」と言う。私も軍の命令だからと観念して「お母さん頼みます」と、持ってきたカンバン、水筒のお茶をおいて後ろ髪を引かれる思いで壕を出た。

目の前に父が倒れている。「兵隊さん、この木をのけてやってください。一日もこのままで苦しかったでしょうに」

兵隊さんと動かそうとするけど、この大木はビクともしない。「明日のこぎりを持ってきて切らなければ」と言われる。私は急いでその場を離れた。早くなんとかしてあげたい、重いだろう。

長いことかかってやっと辿り着いた変わり果てた我が家を後に又真夏の暑さと熱気と悪臭の中を来た時と同じ困難を繰り返して司令部にまい戻った。この時程隊長殿を憎らしいと思ったことはない。

痛んでいるが家の形を残して生きている人たちのいる南山手町に来るとどうして自分たちがあんな目に遭わなければいけないのだろうと残してきた母たちを想って胸が詰まった。

平澤さんも帰っている。平山さんは花瓶にお骨を入れて持っていた敷布で包み宿舎の棚に祀っている。

私は少しでも早く帰らなければと先に報告をさせてもらう。「父即死、姉（次姉）行方不明、母、姉（長姉）、弟、三人負傷」と何度か言葉につまりながら報告。はじめて涙が溢れた。隊長殿は「気の毒に思う」と下を向かれた。すぐ帰らせていただきます。

「今からもう暗くなるぞ、一人で帰れるか」「はい帰ります」と言って宿舎に行ってみる。宿舎では皆夕食をとっている。「あなたも食べてから行ったら」とすすめられるのを断って、「平澤さん帰りましょう」と誘うと「もう日が暮れるし、姉さんが明日でいいって言ったから今晚は泊まってゆく」のだそう。私はあの恐ろしかった長い道程をこの夕暮れに一人で、とふっと暗いかげが胸をかすめたが仕方がない。外の人たちは皆元気な人たちがいるけど、私のうちは長崎に親戚もない私一人が頼りなのだ。菊枝さんが「あなた一人で今から帰るの、私も行ってあげられるといいけど」「ありがとう」と言うと隊長殿が陸軍病院に寄って火傷のくすりを貰ってゆく様にと書いて下さった手紙をしっかりと握って司令部の坂を駆け下りた。道のいい所は走って行かなければ日が暮れてしまう。途中陸軍病院に寄ると誰もいない。「活水女学校の防空壕に皆移っていますよ」と言われて行ってみたが、軍医殿はいない。看護婦さんもほとんど救護のかりだされて今日くすりを貰うのはとても無理だと思った。家の方にも救護班の人が来てくれるに違いないと思って私はここを飛び出した。大波止に出て駅を通り電車をたよりに小走りでどンドンどンドン行く。兵隊さんや皆とおそろおそろ来た午前中に比べると今は、一人で日が暮れないうちに早く帰りたい一心でとても早い。

夏の長い日もとっぴり暮れかけたころ浜口町まで来た。今度はとても早かった。もう死体など恐いと思う余裕もない。松山町の近くまで来ると皆のいり防空壕の方に又勢いをもちかえして燃えだした山の煙りがここまでどンドン来ているのに気付く。動けない者ばかりいる防空壕の中に煙りが入って窒息するんじゃないかしら。私は飛ぶ様に駆けた。うれしいことに向こうから救出班で出ていた司令部の兵隊さんに会う。

「お願いします、うちの防空壕に煙が入ってるかも知れませんが、私一人でどうすることもできません、一緒に来ていただけませんか」と頼む。「困ったなあ、もう帰営の時間なんだよ、代わりに寄越そう。だが私は泣きついて腕をはなさなかった。兵隊さんは仕方がない、なんとか出来るか行ってみようと言われた。途端に私は元気が出て「すみませんすみません」と兵隊さんの腕をはなして走り出した。（略）

私は「まだかまだか」と言う兵隊さんの声を後に聞きながら、倒壊物で歩き難い足元につまづきながらやっと防空壕の近くまで来てみると煙はよその方に流れている。ほっとして急に兵隊さんに悪い気がして、「ご無理を言ってすみませんでした」とお礼を言えるゆとりができた。でも兵隊さんは壕の前にまだ下敷きになっている父、焼けただれた姉を見てびっくりし、どうして火傷のくすりを貰ってこなかったかと私を叱りつける。私が軍医殿が留守だったことを話すと、「よし明日自分が持ってきてやろう」と言われ、お父さんを木

下から出さなければとノコギリを持って2, 3人の兵隊さんを連れてくることを約束された。母は兵隊さんに両手を合わせている。

「元気を出しなさいよ」と私に言われ兵隊さんは帰ってゆかれた。

長い夏の日もとつぷり暮れ防空壕の中には苦しむ弟と姉。しょんぼりと座っている母。眼前に倒れて物言わぬ父。私は急にどうしようもない心細さと、淋しさにおそわれた。

お隣のおばあさんは私が出るとすぐ息を引き取られたとか、もう壕には居なかった。

こうしてはいられない。水を欲しがると、下痢もしている。とにかくまだほの明かりが残っているうちにもう一度何か入れ物になるものを探さなければ、他所の人が昼間めぼしいものは探し集めているのでなかなかない。それでもどうにか役に立ちそうな空き缶などを集めた。昼間拾っておいた洗面器ややかんに遠くまで水を汲みに行き、皆に飲ませ、熱の高い姉の額に濡れタオルをのせ、空き缶で下痢便をとって遠くに穴を掘って埋める。もう周囲は真暗くなってしまった。

こうして暗闇の防空壕での長い一夜が更けていく。何度か遠くまで水を汲みに行ったり汚物を穴を掘って埋めたりしているうちに夏の空ははや、白みかけた様だ。朝から何も食べていないのに空腹も感じない。

8月11日

防空壕での暗闇の夜は長かった。絶えず皆は水を求め、便意を訴える。一人がすんでやっとホッとして額のタオルを取り替えようとする、又次が催促する。こうして暗い道のないところを水を汲みに走り、汚物を埋めたりを繰り返すうちに東の方が明るんできた。

地上の人の苦しみをよそに爽やかな微風が疲れた私をそっと慰めてくれた。

新たな元気を取り戻して私は少しの水で顔を洗い風呂敷で髪をむすんだ。皆は食欲もない、私は少しのカンパンを齧(かじ)り、又昨夜の繰り返しが続く。早く司令部から兵隊さんが来てくれるとよいが、防空壕を出たり、入ったりする度にお父さんの倒れた姿が眼について辛い。死んでしまっただけのあの重い木の下におしつぶされているのでは苦しそうで見るに忍びない。

お昼頃、防空壕の中ばかりも陰気で気が滅入るので先隣りの小父さんをお願いして、簡潔な日除をした所に皆を移すことにする。

お隣は皆、川南造船所にお勤めだったので元気な人が四人もいて羨ましい。今まで片方を向いたまま動こうとしなかった弟を背負う心算で反対側に動かしてみてもびっくりした。下になっていた方の頬は擦れて、青黒く腫れ上がり、背中と首に深い穴があいている、可哀相にそれで今までずっと呻いていたのだ。ちっとも知らなかった。「高明ちゃん苦しい？」。弟は大きな目をうるませて頷いた。側から母が「とっても出血がひどかったから苦しいよね」と。こんな罪もない子どもまでこんな苦しめるなんて。突然私は怒りに、父の死を見たときにも出なかった涙が頬をつたった。

痛がる弟を少しの辛抱と心を鬼にして運ぶ。何度かよろけながら、ひどく胸の痛みを訴

える。家の下敷きになった時肋骨が折れたのではないだろうか。

母は自分で歩く。姉を明るい日の下で眺めたとき、私は胸をつかれた。こんなひどい火傷を負いながら弟を倒壊した家の中から助け出し、その夜は火を避けて弟を背負ってあちこち逃げ回ったと言う。そして貴重品袋をどうしても取り出すことが出来ず焼いてしまったとあやまっていた姉。弟をひっぱり出すだけで力尽きたという。そのうえ弟を背負ったので火傷した腕の皮膚がベラッとむけてしまって、可哀想な姉。今まで弱い母の代わりに一家の支えになっていた。その気持ちがこんな重傷を負っているのに弟と母をかばいながら、逃げ回ったのだろう。私はどんな苦勞をしてでも今全身全霊で優しくしてあげなければならぬ。防空壕の外は照りつける夏の太陽に反ってよくなかった。私はやはり防空壕に戻ることを思い立ったが、皆はもうこの苦痛にも甘んじているかの様に動こうともしない。

私の水くみは近くなって、それだけ何回も冷たいのを汲みに行けるのでホッとしてゆとりができ、姉の髪を梳かしたり弟の足をさすってやることができる。

今日になっても救護班はここまで来てくれない。この皆の苦しみを黙ってみていなければならないなんて。

明日は何とかしてここまで来て貰わなくてはと思う。午後司令部から兵隊さんが3人火傷の薬を持ってきてくださった。話しでは下の方には救護班の人は来ていてもくすりが足りなくて治療が受けられないとのこと。ここまでこのくすりを持ってくるのに苦勞したそうである。

いよいよお父さんの遺体が出してもらえる。

暫くして兵隊さんが「最期なんだから見ときなさい」と呼びに来てくださった。又呼びに来てくださった。でも私は行かなかった。変わり果てた無惨な顔を見るのは怖い。

「そんなに傷ついていない、見ときなさい」と何度も呼びに来てくださったけれど、どうしても行くことが出来なかつた。

黄昏がせまって太陽がかすかな光を反射させながら山のかげに沈んでいった。兵隊さんも「明日の朝でもお骨を拾いなさい」と言い残して帰って行かれた。

私は又暗い永い夜を想うとなんとも言えない淋しさに襲われて気が滅入ってしまう。やはり皆は防空壕に入らなければ夜露は毒だろう。明日はもう防空壕にいよう。

8月12日

今朝は母と二人で父のお骨を拾い花瓶の中に入れて防空壕の中に安置する。

昨夜も私が汲んでくる水で母は一晚中姉と弟を交代で冷やしていた。あの弱い母さんが生きていなんて思いもしなかつたのに、父は一番に死んでしまつて。(略)

8月13日

朝から爆音が聞こえてくる。被害状況を見に来たのか。私はもう敵機など怖いと思う暇もない。

きょうは救護班から上の方は治療にゆけないから、城山小学校まで動ける人は治療を受けに来るようにとの達示があった。お姉さんはもうこんなかっこうで行くのはいやだと言う。

まず弟だけでもと思って苦しがるのを背負って休み休み長いことかかってやっと治療所まで辿り付く。

やはり肋骨が折れているとのこと。出血が多かったので欲しがってもあまり水分を取らせない様に出血多量に水分を与えて死亡するかもしれないと言いかされて愕然とした。あんなに苦しがるのだからと今まで沸かしたのならと欲しがると飲ませていた。恐ろしいこと、大丈夫だろうか。くすりを待っているから次姉の治療に来て貰う様にくれぐれも頼んで、帰りは弟を抱きかかえてゆく。

学校にいた長姉はどうなったのだろう。先生方助かった人はいないのかしら。苦しがる弟をつれては捜し回ることもできない。ああ元気な人の力がほしい、長姉もなんとか探さなければ可哀想。(略)

今日も又夕方になったか救護班の人はとうとう来てくれない。

又嫌な夜。弟のお水を苦しがるのには胸をえぐられる。

8月14日

(略) 今日まで伊王島の父の会社からは誰も来てくれない。母は学校に行ったきりの下の姉が帰ってきた夢をみたそう。まあ嬉しやと思ったら眼が覚めて周囲は変わり果てた防空壕の中。私は「お母さん、学校の先生たち、諫早の病院に運ばれたそうよ」と昨日救護班の人が言われたことを繰り返すが、「いいえ生きていればここまでどんなにしてでも帰って来ましょう」と言う。横から姉も「そうよ家のこと心配してどうしてでも帰って来ると言う」と言う。家から学校まで5分もかからなかった。夕方帰りのおそい下の姉をよく私と弟が迎えにいかされた。「又ピアノの練習をして時間のたつのもわからずにいるから」と母に言われて暗く静まり返った校舎の奥の方からピアノの音がしていたものだ。どんな死に方をしたのだろう。家族から離れてたった一人で、でもきっと仲良しの先生方と一緒にだったろうと自分に言い聞かせる。(略)

8月15日

昨夜から姉が高い熱を出して側に居るだけで熱気を感じる。

「顔で火が燃えているみたい」と言う。火傷で皮膚がはがれているうえに高熱なのでそう感じるのだろう。

ときどき正気になってそんなことを言うかと思うと、又熱にうかされてうわ言を言ったりする。

一杯の洗面器の水がすぐお湯のようになる。何度も外の井戸まで暗い道を辿って水を汲みに行く。

そばに死体がころがっていても、もう怖いとも思わない。

母は黙って祈るような気持ちでいるのだろう。タオルをしぼっては額にのせて冷やすことを繰り返している。

明け方近くと思われる外はまだまだ暗いうち、姉はフーッと大きな息を一つしたかと思うと呼吸が止まった。このときはじめて今まで泣き顔も見せなかった母が姉にすがって泣き出した。私もそんな母の姿を見てあとからあとから涙があふれてどうしようもなかった。

弟は相変わらずうめいている。今まで頼りにしていた姉に死なれて母はガックリした様子だ。私はどうしようもなく先隣のおじいさんに知らせに行った。お隣は4人も元気な人がいたが、もう親戚の家にでも引き揚げたのか誰もいない。先となりのこのおじいさんは一人ぼっちになってぼんやりしてられるが、とにかく来て貰った。おじいさんは壕の入り口で火をたいてとにかく夜明けを待ちましようと言われた。

姉の手を組ませてあげようとしたらもう硬直していて、ポキッとにぶい音がした。あんなに苦しんで死んだから硬直が早いのだろうか。

今まで座ったままだった母は急に気落ちしたのか横になったまま物言わない。私は急に心許なく寂しくなってしまう。やっと夜が明けたが私一人の力では姉を壕から出すこともできない。死ぬとこんなに重くなるものだろうか。おんぶすることもできない。

母が一切の思考力を失ったようだ。私の力にもなってくれない。どうしたらいいかと一人思い惑う。(略)

私が姉に火をつける。炎天の下、野焼きをする。ものすごい炎、臭い。

可哀想なお姉さん、とうとういなくなってしまったのね。

教師をしていたのに、母が体が弱かったので学校を辞めて私達の着るものから、お布団の縫い直し、食事の支度、何でもやっていた。近所の方たちからも、もう良いお嫁さんになれると言われていた。若いのに楽しい思いもしないで、働いていたばかりいた姉がこんなに苦しんでこんな死に方をしようとは。

夕方、父のときは母と二人でお骨を拾ったが今では弱ってしまって母はもう動こうともしない。そんなに姉の死がショックだったとは。(略)

又嫌な暗闇の夜が来る。姉の居なくなった壕の中は急に広くなった。

母と弟が横たわり、私は二人の側にシヨンボリと座る。

8月16日

ただ黙って横になっている母と、苦しむ弟の看病、何にも食べる気力もない。

水を汲みにいくと戦争がおわったそうとかか耳に入る。

又デマだろう。何の感動もない。

8月17日

今日伊王島から会社の田原さん夫妻、深川さん、それに炭鉱の吉野さんの奥さんがやっ
と来て下さった。もうこの頃は舟も敵機が低空できて機銃掃射をするので交通船は通って
いなかったのだから船を持っている船頭さんにお金はいくらでも出すからと頼んでもなかなか
うんと言ってくれる人がなかったとか。やっと今日来てくれる人が見つかって伝馬船で何
時間もかかってやっとここまで来て下さったのだ。私は手を合わせたい気持ち、一度に全
身の力が抜けて、ガックリとしてしまう。

田原さんの奥さんが、あんなに明るい家庭だったのにこんなに変わっていろいろとは思
いもしなかったと涙を流される。喜美子さんはどうなったんですかと言われたが、私一人
は今まで学校に探しに行くこともできなかった。とにかく学校まで深川さんと私で探しに
行ってみる。運動場に沢山の死体が集めてある。

誰がだれか判別できる様な死体はない。辛うじて衣服が少しでも付着していればそれ
で見つけるしかない。

変わり果てた死体を見るのは恐ろしかった。もうない方がよいと思ったり、そのまま一
人残して行くのは可哀想だと思ったり、見覚えのある洋服の色をみるとハッとして眼をそ
むけたくなる。結局姉らしい人はなかった。これから伊王島に引き揚げるのに一人何処か
で、ころがったままになるのではないかとたまらない気がする。

担架が一つ持ってきてあったのに弱ってしまった母が乗せられてゆく。

弟は背負われて壕を出る。皆が出てしまった後、私はしみじみと周囲を見回してみる。
眼をつむると、木陰の涼しげな我が家が眼に泛(うか)ぶ。「おかえりなさい」といつも笑
顔で迎えてくれた母、土曜日毎に伊王島から帰っては家庭菜園で働いていた父、お台所に
いる姉。

中学生になってからは、いつも勉強ばかりしていた弟、中間テストでは学年で7番にな
り、期末では一番になるぞなんて頑張っていたのに。九日はその期末テストの終わった日
だった。それから一瞬のうちに変わり果てた壕生活、壕での暗い夜は嫌で嫌でたまらな
かった。あとからあとから思い出は尽きない。

製鋼所の裏の川に止めてある舟まで行く途中、道端の焼けこげた畳の上に弟が寝かせて
ある。びっくりした。苦しいから暫く下におろしてと言ったとか。可哀想に担架に乗せら
れたらどんなに楽だったろうに、それをおもいやる意識も、もう母にはなくなっている。

やっと舟に落ちついて寝かせ、傘をさしかけて下さった。舟は焼土を後にのどかな島に
向かって船頭さんは、一生懸命、艀を漕ぐ。長崎港を出て、蔭ノ尾灯台のあたりまできて
伊王島の方を見ると青々と広がる空と海、緑の島。あんな焦熱地獄なんて、まるでウソの
世界の様だ。でも母と弟は何をされても無感動。舟の中でおにぎりを食べている私を見て
いる弟の眼の色、欲しそうに、はじめてそんな表情をした。でも食べる力もない。食べて
みせなきゃよかった。私は弟が可哀想で可哀想で自分だけ食べたことが悔やまれた。

波止場近くになると子どもたちがたくさん泳いでいる。

弟もあんなにしてよく泳いでいたのに、兄が大学から夏休みで帰ってくると、田原さんの孝さんと伝馬船で沖の方に出るのに小学生だった弟は平気で深い深い沖でも泳いでいた。

「高明ちゃんも早くよくなって泳ぐようになろうね」と言っても何の反応もない。

簾の下がった涼しい家の中に二つの床がのべられ、久しぶりにのびのびと手足をのばして母と弟を休ませる。

ただただ感謝。

炭鉱病院のお医者様もちゃんと待っていて下さった。ありがたいことだ。

弟は盛んにお水を欲しがらる。深川さんの奥さんが冷やした麦茶をくださる。弟は、私にそっと「井戸端に行ってガブガブ水が飲みたい」と言う。沢山沢山飲ませてやりたい。でも治ってもらう為には辛抱して貰わなければならない。麦茶で我慢させる。

足がしびれると言う。この炎天下に何も食べないで体力も尽き果てたのだろうと足をさすってやる。やがて「お姉ちゃんの顔が見えなくなるよ」と言うと言が据わってきた。私は道端で眼を開いたまま死んでいた近所の人を思い出した。そっと瞼を合わせるようにさすってやるとつむって、それっきりあの大きく綺麗な眼は既にもう開くことがなかった。

今まで、だまって眼をつむって休んでいた母が何かを感じたように弟の方を向こうとする。お医者さんが「今、注射をしましたから坊ちゃん静かに休まれていますよ」と母が力を落とさないためか嘘をつかれた。母は私に「高明は死んでしまったんでしょう。手を組ませてやって頂戴」と言う。私は「違うのよお母さん、高明は眠っているのよ」と言うけど、母は静かに眼をつむって「とうとう親子四人とられてしまった」と呟いた。

やっと家の中でお布団に寝かせてやる事ができたのにたった一時間後に弟は死んでしまった。こんなことならお水を沢山沢山飲ませてやればよかった。治って貰いたいばかりに。あんなに欲しがっていたのに。

その後母の容体も変化するばかり。お医者さん、

8月18日

会社の方たちがつきっきりで枕元で見守って下さる。私はせめて母だけでも助けて下さいと心の中で繰り返し祈っていた。

お医者さんが今の内に何か言いのこしておかれることがあったら聞いておいた方がよいと言われる。

そんなことしたら母が自分ももう駄目だと力を落とすからと言ったが、田原さんがもう聞いておいたほうがよいと思われたのか「奥さん何か言っておかれないことはありませんか」と聞かれる。母は「典子が、典子が、勇さん、古川の兄...」ととぎれとぎれに父の弟と母の兄の名を言った。「典子さんを頼まれたいのでしょうか。よく解りました。ちゃんと頼んであげますよ」。母は「典子が、典子が...」とだんだんかすかにしか聞き取れない小さな声になりながら、息が切れるまで私の名をいいながら、明け方の四時半ごろ最期の母まで私をたった一人残して逝ってしまった。

この島は、土葬なので座り棺なのにどうして用意されたのか寝棺が二つ用意された。母と弟はその中に入れられ、母のお棺の蓋が閉められた。弟のお棺の蓋を閉めようとされたとき、突然私は「待って」と弟の屍体の上におおいかぶさり一生もうこの顔が見られなくなると、顔から足の指の形までこの頭の中に刻み込んでおこうと必死に見つめていた。田原さんの「典子さん、さあもういいでしょう、早く舟で運んで貰わなければ人夫さんが待っているから」と私をそっと弟から引き離し蓋をして打ちつけられた。

ふだんは母が死んだらどうしようと思っていたのに現実に母と弟の死を前にしてとった私の態度が解らない。きっと若くして死んでしまった未来ある弟が哀れであったのだろう。

高島が見える方の海岸の岩場にお棺は運ばれ伝馬船二隻で石炭と薪が運ばれ私が火をつけた。深川さん、田原さんの奥さんは手を合わせられ皆で黙って見つめていた。

「明日お骨を拾いにきましょう」と私をうながして帰り出した。私は母と弟から一步一步遠く離れてしまうような気がして重い足をひきずって小母さんたちと帰った。

上の兄は出征したまま何処にいるのかも解らない下の兄は特別操縦見習士官として戦闘機乗りになり、特攻隊に選ばれて辞世の歌を書いた手紙がきていたし、もう生きていないかもしれない。そんなであるから母も私一人残していくことで死んでも死にきれない気持ちだったのだろう。命のなくなるまで私の名を呼び続け、叔父たちに私のことを頼んでくれる様に会社の方に言いたかったに違いない。苦しい息の下から言葉にならない言葉であったが、母の言いたいことは私にも会社の方にもよくわかった。

母はどんなに辛い気持ちで死んでいったであろう。

皆に死なれた最後に私一人を残して逝かなければならなかった母の心を想うと胸が痛む。

(了)